

賢治作品と緯度観測所* (*現在の国立天文台水沢 VLBI 観測所の前身)

(1)「風野又三郎」

宮澤賢治は花巻から緯度観測所を何度か訪ねています。賢治は新式の観測に特に強い関心を持っていたようです。このことは、作品「風の又三郎」の初期形「風野又三郎」〔文献 A10〕に見ることができます。作品の中で風野又三郎が村の子ども達に語りかけている場面があります。風が吹いて水沢の上空を通ると、それが記録されて、外国の方まで報告されるんだ、と。場面にはテニスのラケットを持った木村博士も登場します。

当時岩手の内陸部にはまだ測候所がありませんでしたが、賢治は緯度観測所の様子を詳しく見ていることが分かります。「風野又三郎」には、賢治が初めて緯度観測所を訪問した時のことが大きな影響を与えているのです。訪問の時期は、作品や資料の年代、また記述内容等から推定して、1920年の梅雨の頃であったろうと考えられます。この時期は、賢治が盛岡高等農林学校の研究生を5月に修了した時であり、作品「風野又三郎」が書かれたのは翌々年の1922年の9月頃と考えれば自然と思われま。この1922年は、岩手では最悪の天候が続き、春先に暴風雨による洪水あり、7月と9月に激しい台風が襲い、農業などに大きな被害を残しました。例年にない悪天候の年だったのです。



国際緯度観測に用いられた
眼視天頂儀

賢治は、童話「風野又三郎」の中で、主人公が臨時緯度観測所に来て建物の上で休みながら下を眺めている場面をこう描いています。

『そうだ、そのとき僕は海をぐんぐんわたってこっちへ来たけれども来る途中でだんだんかけるのをやめて、それから丁度5日目にここも通ったよ。その前はあの水沢の臨時緯度観測所も通った。あそこは僕たちは日本では東京の次に通りたがる場所なんだよ。なぜって、レコードでもなんでも外国の方まで知れることがあるからなんだ。』ここでは、風は日本だけの風でないことを強く印象づけている。賢治の時代、梅雨はインド洋からの風に起因するとの考えはなかったが、視点を広げた優れた知見を示します。

ここで、海とは上海の方の海であり、そこから風が吹いてきて5日目に種山ヶ原まで来た。その前の日はあの水沢の臨時緯度観測所も通ったと言います。風は東京を通れば中央気象台の風速計で記録されます。同様な観測が臨時緯度観測所でも行われていました。その記録(レコード)は国際緯度観測の中央局であるドイツにまで報告されていたのです。賢治はそのことが分かっていて、「通りたがる」と言います。風と同じように自分も記録されるとの賢治の気持ちも見えそうです。

水沢の緯度観測所は1899年から1920年まで臨時緯度観測所でした。正式に緯度観測所となったのは1920年10月のことで、賢治がそのことを意識してわざわざ「臨時緯度観測所」と書いたのであれば、この体験は1920年10月よりも前であることを示します。

時期として『ちょうど入梅だったんだ。』と記述していることから、6月初めが想定されます。作品には梅雨入りのテニスコートが描かれます。俄かに下の方で「大丈夫です。すっかり乾きましたから。」と

いう声。木村博士と技手の人がテニスのラケットをもって出てきてプレイをしています。木村博士は軟式テニス的高手であり、上手であり技手が、たじたじ、なのを見て、又三郎は突風を起し博士の繰りだす球を逸らせて、ひどいいづらをします。でも又三郎は『これ位でいいかなあ、僕は木村博士はまあ好きだね』といい残しながら飛び立ちます。

天文学の世界の権威である木村博士に風の難問を提示したかったのか、いろいろ想像できる場面を残します。

(2) 「晴天恣意」

1922年の11月末、賢治は最愛の妹としを病で亡くします。その衝撃は大きく、6ヶ月間ほとんど作品が書かれていません。ようやく1年4ヵ月を過ぎた日、賢治は再び緯度観測所を訪れます。そして観測室の近くで一つの体験をします。その時、手には自家製の星座早見を持っていたのでしょう。自分と妹としとの星と思っていたと考えられる「アンドロメダの連星」*を国際観測の眼視天頂儀の視野に見ようとします。昼過ぎの天空は晴天でした。当然星は見えません。でも星座早見をその時刻に合わせるならば、星は見えないながら、「アンドロメダの連星が天頂近くを通過して行くことができます。もし緯度観測所の天頂儀がその方向に向いていたならば、レンズを通して視野に入りその心臓部のマイクロメータのくも糸を横切って行ったと考えてもいいわけ訳です。賢治はそう考え、今日のはうるおい輝くすばらしい晴天であると自分に言い聞かせたのでしょう。こうした心の思いを短詩「晴天恣意」〔文献A11〕(1924年3月25日、緯度観測所にての記載がある)に書き留めます。

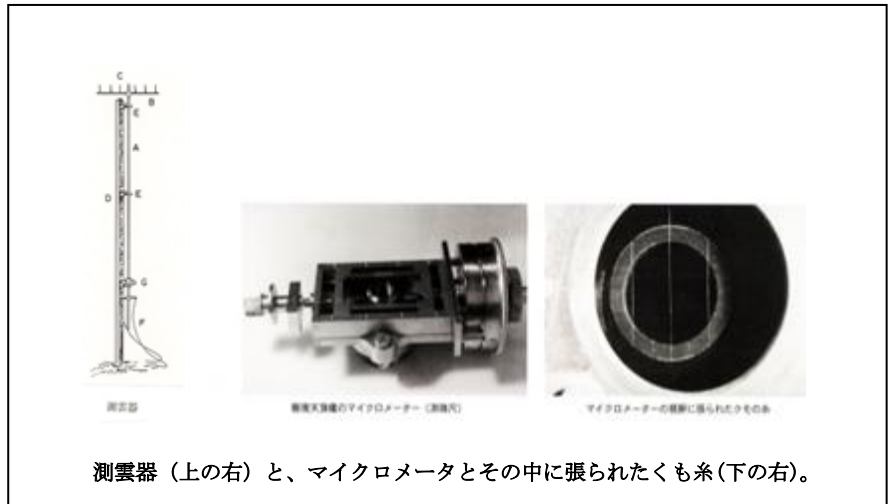
しかし、後になって誰かに緯度観測の詳しいことを聞いたのでしょう。アンドロメダの連星は緯度観測には使われない、それは明るすぎて、国際緯度観測には向かないのです。水沢に尋ねてきた目的が半ば裏切られ、きっと失望したに違いありません。大事な観測には厳しい制約があり、使われる星はほとんど小さな暗い星（望遠鏡なしではは眼に見えない）でした。小さくなければ観測の位置の精度が出ないので。賢治は考え方を変え、はじめの原稿に書いた「天頂儀の蜘蛛線をきり」の文字を消し、代わりに「雲量計の横線をきり」と書き直します。天頂儀から雲量計に変えたのです。「雲量計」は天頂儀からやや離れたところにあり、上空の雲の量と流れを測ることに使われていました。風に強い関心をもつ賢治は、天頂儀とともにこの「雲量計」を忘れませんでした。雲量計は星の明るさに関係なく天空の広い地域をカバーします。

あのアンドロメダの連星も天頂儀ではなく、やはり天頂近くを見る雲量計の横線をきって行ったとすれば、現実として何の問題もありません。こう転換し書き換え、気持ちの迷いが晴れたのでしょう。「晴天恣意」の最後に、「いまやわたしのまなこも冴えふたたび陰気な扉を排してあのくしゃくしゃの数字の前にかがみ込もうとしますのです。」と述べます。

雲量計の横線であっても、アンドロメダの連星がいま天頂を通過していった、との強い思いが、賢治を元気にさせます。再びむずかしい問題に挑戦し、緯度観測所の陰気な扉をあけて中に入り、倉庫にある観測記録帳（おそらく岩手の気象の講義に必要な緯度観測所の気象記録）の読み取りを続けるのです。恐らく午前中から続けている作業なので疲れた「まなこ」でしたが、碧瑠璃の天がそこにありました。

意識の転換とともに、大きな一歩を歩み出したことが読み取れます。賢治はこの年の暮、早くもあの「銀河鉄道の夜」の初稿が完成させます。「妹とし」は天の真ん中を通って行ったに違いないとの思いが賢治を動かしたのでしょうか。作品には星のきらめく銀河に人々の苦悩が投影され、北のはてから南のはてまで続く不思議なまた楽しい旅がわれらを魅了するのです。しかも、意外にもその深淵な銀河の旅から帰ったジョバンニの口から語られたことは、地上で自分に残され与えられている務めを果たすことでした。賢治はその後その実現にまい進します。

*作品「晴天恣意」の初期稿のアンドロメダの連星の文字の下に「私の夏の日に恋人」のメモ書きがあります。このことから推測できるように、妹と自分のことを連星のように考えたようです。



測雲器（上の右）と、マイクロメータとその中に張られたくも糸（下の右）。

(3) 「測候所」

天文台、測候所＝旧緯度観測所（現在の国立天文台水沢 VLBI 観測所の前身）

賢治の作品には緯度観測所の呼び方に天文台と測候所の二つが出てくる。童話「土神と狐」には「水沢の天文台」とあり、この「測候所」〔文献 A11〕には文字通り「測候所」とある。緯度観測所には天文観測の役割と、その現象の賢治は作品の意図する内容によって二つを使い分けたのであろう。この作品には1924年4月6日の日づけが記されて先に紹介した「晴天恣意」を書いた約10日後に当たる。岩手の内陸部には測候所がなく（盛岡測候所の設立は1923年）、緯度観測所では1899年から気象観測も行い、地域の方々にも分かるような簡単な天気予報も出していた。一般の人も記録された気象データを見ることができたようである。詩「測候所」からは賢治の気象に対する関心の高さを知ることができる。作品には、観測所の建物の二階と思われる処から公園（水沢公園）を訪れている人々とシャーマンの山（早池峰山）の様子が描かれており、天候の悪化の兆しが見え、凶作の年になることを案じている。

(4) 「土神と狐」

この作品の中で、狐が樺の木に語りかける場面があります。「星に橙や青やいろいろある訳ですか。それはこうです。全体星というものは、はじめはぼんやりした雲のようなもんだったんです。いまの空にも沢山あります。たとえばアンドロメダにもオリオンにも獵犬座にもみんなあります。獵犬座の渦巻きです。（略）」

「まあ、あたしいつか見たいわ。魚の口の形の星だなんてまあどんなに立派でしょう。」

「それは立派ですよ。僕水沢の天文台で見ましたがね。」

「まあ、あたしも見たいわ。」

「見せてあげましょう。僕実は望遠鏡をドイツのツアイスに注文してあるんです。来年の春までには来ますから、来たらすぐ見せてあげましょう。」狐は思わずこう言ってしまいました。そしてすぐ考へたのです。あゝ僕はたった一人のお友達にまたついうそを言ってしまった。ああ僕はほんとうにだめなやつだ。(略) 樺の木はそんなことも知らないでよろこんで言いました。

「まあうれしい。あなた本当にいつでも親切だわ。」(略)

また樺の木が言いました。「あなたのお書斎、まあどんなに立派でしょうね。」

「いゝえ、まるでちらばってますよ、それに研究室兼用ですからね、あっちの隅には顕微鏡、こっちにはロンドンタイムス、(略)」

「まあ、立派だわねえ、ほんとうに立派だわ。」

「ふん」と狐の謙遜のような自慢のやうな息の音がして、しばらくしいんとなりました。

土神はもう居ても立っても居られませんでした。狐の言っているのを聞くと、全く狐の方が自分よりはえらいのでした。いやしくも神ではないかと今まで自分で自分に教へていたのが、今度ではできなくなったのです。
(原文から用語を日常語に変えてあります。)

水沢の天文台とあるのは緯度観測所です。そこにはドイツ製(Wanschaff 社、1899年(明治32年)製作)の高精度の望遠鏡がありました。賢治はそれを見ることができ、また触ることのできたと思われまふ。狐が語るようにそのような望遠鏡を持つことができれば、アンドロメダ星雲だけではなく土星の輪でも目で確認できます。狐の見栄なのでしょう、望遠鏡そのものを自分の書斎に持ち、憧れの娘と共有したいとの思いから、ついあらぬことを言ってしまいます。当時このクラスのものには一般にはとても手に入れることができない物でした。

土神はこんな大うそつきの狐が大嫌いです。狐を見るとどうしようもない怒りが込み上げて来ます。でも土神もどうやら同じで、内心は嫉妬心と虚栄に苦しんでいましたが、それでも狐に対する怒りのままに狐を追い詰め、殺してしまいます。作品は人々の中にもある見えや妬みなどへの葛藤を描かれものですが、当時の緯度観測所等への賢治自身を含めた一般の人々の感じ方、好奇心などが描かれていると思います。

参考文献

A10 校本 宮澤賢治全集第九卷(1995年)筑摩書房

A11 校本 宮澤賢治全集第三卷(1996年)筑摩書房